

## 研究速報

## 閉塞性黄疸におけるインシュリン・グルカゴン療法の応用

小林 衛 武藤 正樹 杉田 昭

最近 hepatotrophic factor として、インシュリンやグルカゴンが注目され、劇症肝炎や肝不全例に対してもインシュリン・グルカゴン療法がおこなわれている。われわれはインシュリンやグルカゴンに利用作用があることを認めたので、PTC-ドレナージ施行後の閉塞性黄疸例にインシュリン・グルカゴン療法を応用し、その利胆効果と減黄効果を検討した。

## 対象と方法

悪性閉塞性黄疸7例(血清ビリルビン値16.0~21.8 mg/dl, 平均18.6mg/dl)に PTC-ドレナージ施行後平均10日目より、インシュリン・グルカゴン療法(レギュラー・インシュリン20単位, グルカゴン・ノボ1mg, K, Pを含む約10%ブドウ糖電解質液250mlを1時間で点滴静注)を2週間おこなった。なお低血糖症予防のため5%ブドウ糖液250mlを続けて点滴静注した。インシュリン・グルカゴン療法開始前日の7例平均排出胆汁量を100%として、療法前後の胆汁量の変化を%増減率で表わし、比較した。また血清ビリルビンの消褪から減黄効果を調べた。同程度の悪性閉塞性黄疸6例(平均血清ビリルビン値18.5mg/dl)を対照とした。

## 成 績

図上段のように、点線の対照例も排出胆汁量が一定の勾配で徐々に増加する傾向があるが、実線のインシュリン・グルカゴン療法例は治療開始後より増加傾向が現われ、7~8日以降は増加率が高くなり、14日目には約100%の増加率を示した。また図下段のように、平均血清ビリルビン値は PTC-ドレナージ後10日までには両群で殆んど差はないが、15日以降はその較差は広がり、インシュリン・グルカゴン療法の減黄効果がみられた。

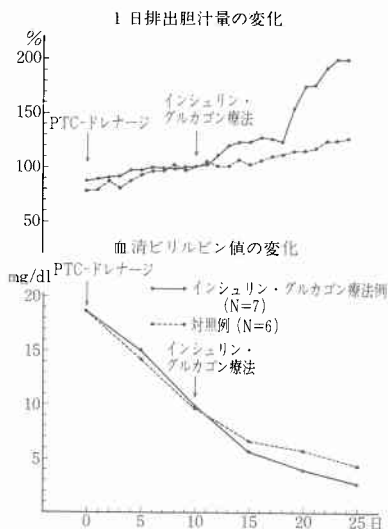
## 考察と結論

閉塞性黄疸においては耐糖能やインシュリン反応が低下しており、相対的低インシュリン血症状態にある<sup>1)</sup>。一方グルカゴンには利胆作用<sup>2)</sup>のほかインシュリン分泌作用もある。以上の観点から閉塞性黄疸例に対して、インシュリンやグルカゴンを投与することは理にかなった治療と考えられる。そこでわれわれは PTC-ドレナージ後の閉塞性黄疸例にインシュリン・グルカゴン療法を応用してみたところ、利胆効果が認められ、2週後には胆汁量は2倍に増加した。これに伴い減黄効果も認められた。したがって閉塞解除後の黄疸例には、インシュリン・グルカゴン療法が減黄を促進させる意味で有望な方法であると思われる。

索引用語：インシュリン・グルカゴン療法

## 文 献

- 1) 小林 衛, 嶋田 紘, 米沢 健他: 閉塞性黄疸における耐糖能とインシュリン・グルカゴンモル比の変動. 肝臓, 22: 46-51, 1981.
- 2) Jones RS, Geist RE and Hall AD: The choleretic effects of glucagon and secretin in the dog. Gastroenterology, 60: 64-68, 1971.



国立横浜病院外科<昭和56年9月14日受付>

INSULIN-GLUCAGON TREATMENT OF OBSTRUCTIVE JAUNDICE

Mamoru KOBAYASHI, Masaki MUTO, Akira SUGITA

Surgical Department of Yokohama National Hospital, Yokohama